（1）梶木典子教授ヒアリング記録

日時：2021年2月17日水曜日　12時00分～13時00分
ヒアリング対象：神戸女子大学家政学部　家政学科　梶木典子教授
参加者：一般社団法人水辺ラボ　杉本・廣井　　ワイキューブラボお手伝い　塩山

子どもの遊び環境をご専門にされている、神戸女子大学の梶木典子教授に、子どもの遊び場としての東横堀川の可能性についてお話を伺いました。

神戸女子大学家政学部家政学科教授。特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会副代表、IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）日本支部事務局長、兵庫県青少年愛護審議会委員、神戸市教育委員会、大阪府市文化振興会議委員等。
全国の冒険遊び場づくり活動などの子どもの遊び環境の研究や大学生とともに神戸をフィールドに地域連携事業などを実践している。

子どもも大人も、遊べる・使える公園へ

● 東横堀沿いのまちを一緒に歩いていただき、現在、建築中のβ本町橋も見ていただきました。東横堀川ならではのβ本町橋や公園の利活用について、率直に感じたことを教えてください。

（梶木）
先ほど、児童数が増えて校舎の増築工事中の開平小学校の様子を見ました。子どもが増えると、この辺りには園庭がない保育所が増えているのではないでしょうか。そういう保育園児たちが遊べるしかけがあるといいなと思いました。お散歩カーで公園に入って来れて、水遊びが出来るスペースがあれば、安心して子どもを遊ばせることができると思います。夏にビニールプールを出して、園庭がない保育所が使えるようにしてもいいし、近所のお母さん方にビニールプールを持参してもらい、遊んでもらえばいいですね。ちょっと人工芝を引いて、日よけのシェードがあれば川から流れてくる風もあるでしょうし、夏にも来たくなると思います。冬にはそのビニールプールに砂を入れるなどの工夫をすれば簡易砂場となり、子どもたちは自由に遊ぶと思います。遊具を設置するよりもよっぽど安くすみますね。神戸市立須磨離宮公園でもビニールプールを使ったイベントをしていますが、大人気です。
多くの子育て支援施設は屋内が多いです。特にこの辺はそうだと思います。本町橋が子育ての支援的なエリアになるといいですね。

【須磨離宮公園で開催された「ちゃぷちゃぷプールで遊ぼう」の様子（出典：神戸市HP）】

● 近くに川があるということで、水辺の活用についてはどう思われますか。
（梶木）
水辺は危険もあります。公園で複数の目があるというのは安心感がありますね。目を離した隙にちょっと見守ってもらえる環境があればいいと思います。保育士だけではなない大人の目があるということはいいことですね。

● もう少し年齢が上の小学生の放課後の過ごし方について、遊ぶ場所の選択肢が少ないことに問題意識を持っています。β本町橋が、子どもたちの遊び場となる可能性について、どのように感じられたでしょうか。
（梶木）
10年前と現在の子どもの遊び方の実態調査をしたことがあります。子どもが友達（他人）の家に遊びに行く機会がすごく減っていることがわかりました。子どもが友達同士であっても、親同士が知り合いじゃないと、人の家に遊びに行かせられないという親が増えています。特に女の子を持つ親は、行った先の家にどんな人がいるかがわらかないと不安に感じているようです。閉じた空間に子どもを遊びに行かせるというのは不安に感じる方が増えています。一方で、道路は危ないので遊べません。そうすると公園の独り勝ちです。公園か自宅かしか選択肢がありません。

● 具体的なアイデアがあれば、ぜひ教えて下さい。
（梶木）
ボードゲームや将棋を置いておくのはどうでしょうか。テレビやゲーム機を使わないゲームに触れ合える機会があるといいと思います。ボードゲームや将棋は基本、1人では遊べません。複数人でボードゲームをすると、それはコミュニケーションになります。駄菓子コーナーなんかがあれば、駄菓子を食べながら遊べます。将棋はお年寄りも参加できます。
けん玉遊びも良いかもしれません。コロナウイルス感染症であまり遊びができない中、けん玉はソーシャルディスタンスをとる必要があるので、良いですね。例えば、β本町橋に行けばいろんな種類のけん玉で遊べるなど、昔の遊びに挑戦できる環境、仕組みがあれば、面白いです。
単純に何か素材を置いておいて、子どもが選んで遊べる環境があれば、工夫をして遊び創造性が生まれます。ロープや糸も子どもは大好きですね。自然の素材（どんぐり、松ぼっくり）があれば工作もできます。素材セットを作って貸し出すのも良いかもしれません。そんなに広い場所がるわけではないので、遊具を設置するよりはいいと思います。
「水辺のトランク」としておままごとができるセットなど、貸し出しセットを作るのはどうでしょうか。神戸市の公園でシルバニアファミリーの貸し出しをしたことがありますが、大人気でした。家の中で遊ぶものだと思っていたおもちゃを使って、外でも遊べるという意外性も良かったのかもしれません。
いろいろとやっているうちに子どもたちから希望が出てくると思います。まずは子どもたちの意見を聞けるように、ご意見箱や子ども会議などの場があるといいですね。

● 高齢者の公園の利活用について、感じたことがあれば教えてください。
（梶木）
高齢者向けには、お散歩コースマップを作ってみてはどうでしょうか。みんなで準備体操をし、周辺

の散歩をしてきてもらい、血圧を測れるサービスがあればいいですね。それで、β本町橋でついでにお茶を飲んで帰ってもらうのはどうでしょうか。拠点だけ整備するのではなく、人がまちを歩く仕組み作るといいと思います。
イギリスに「Green Gym(グリーンジム)」を展開しているNPOがあります。体を動かして緑や花の手入れをすることが健康的な運動で、それをグリーンジムと呼んでいます。ティータイムの時間もあります。お手軽なジムにもなるし、地域活動に縁がなかった人も関わるようになるのではないでしょうか。地域もキレイになるし、「活動」と言ってしまうとやらされている感じもありますが、「ジム」とすると自分のためにやっているように思えます。そういうネーミングも大事ですね。

「ここにくれば地域とつながれる」場所になれば、地域とつながりたい大学や企業と出会える。

● 環境学習から見た公園や水辺の利活用の可能性についてはどうでしょうか。

（梶木）
環境学習はとても大事だと思います。近くに東横堀川があるので、生物の専門家がいるといいですね。周りを探せば様々な専門家がいると思います。バードウォッチング好きや魚好き、蝶々好きもいるはずです。来ていただいて、いろいろと教えていただいたらいいと思います。
神戸の六甲道駅北の復興公園で、ここで生えている葡萄のツルを使って、クリスマスリース作りをしたことがありますが、大人気でした。子どもは何でも遊びにします。四季折々の実のなる木を植えたら、季節ごとに楽しめるし、環境学習にも活用できます。

● 教育というと、学校との連携も大事になってきますね。

（梶木）
地元の学校の先生との関わりがあればいいですね。生物部などに声をかけてはどうでしょうか。神戸の住吉川では中学校の生物部が生き物観察をしています。また、近い大学などに関わってもらえる可能性もあると思います。フィールドを探している学校があるはずです。
学校は「地域との連携を」と言われていますが、なかなか進まないところがあります。学校も地元との連携先を求めています。拠点があれば、行きやすいし、連携しやすい。先生たちは、どこに行けば地域と繋がれるかがわからないので、β本町橋が「ここにくれば地域とつながれる」場所になればいいですね。
学校との連携では、先生に協力してもらうことが必要です。学校の先生に負担をかけない工夫が大事です。授業をパッケージにして持っていくと先生も取り組みやすくなりますし、学びの目的と安全性が伝われば先生はやりやすいと思います。一度やってみていいなと思ってもらえたら、先生ネットワークでどんどん広がります。

● 学校との連携を探る中で、子どもたちにβ本町橋の運営に関わってもらうことも考えています。実際に大学生と地域と連携事業をされる中で、工夫していることや気を付けていることはありますか。

（梶木）
実際に学校や公園で何かをするときは、サポートメンバーの大学生も複数学年関わってもらうようにしています。複数学年が関わることで、世代継承をすることができます。
また、名ばかり参画ではなく、変わっていくところまで見せることが大切です。発表をし、実際に変

わるところを見せる。自分たちが動けば社会が変わるという実感をもたせないといけません。
β本町橋では、「ここでこんなことがしたい」を形にしていけたらいいですね。周辺には企業も多いので、企業にも参加してもらって、子どもたちに発表してもらうといいかもしれません。

【神戸森林植物園で開催された梶木先生のゼミ生による遊びのワークショップ（出典：神戸女子大学HP）】

● 周辺に企業さんもたくさんいらっしゃるので連携も可能ですね。

（梶木）
企業にサンプルなど廃材提供してもらうといいですね。子どもたちが廃材バイキングでまちをつくるワークショップもできそうです。子どもが楽しそうにやっていると、親も一緒にやりだすと思いますよ。

地域愛がまちの魅力になる。地域の人たちの居場所としての水辺。

● 先ほど、まちあるきの中で、e-よこ会（東横堀川水辺再生協議会）で活動をされてきた地域の方々にお会いをしました。これからの東横堀川の拠点としてのβ本町橋の役割について、どう感じられたでしょうか。

（梶木）
テレビで放送されている「となりの人間国宝さん」（地域の個性あふれる人）に認定されるという目標を掲げてみるのはどうでしょうか。須磨にも「となりの人間国宝さん」に認定された方がいらっしゃいます。その方はカフェを運営されていますが、地域のイチゴを使ったメニューを出したり、一芸の出来る店員さんがいたり、またそれらをSNSを上手く活用して発信しています。地元の子どもたちからも人気です。地域の拠点のカフェになっています。それが理想の姿ではないでしょうか。地域の居場所になっています。地域愛があると、受け入れられます。地域愛をいかに出していくかです。
また犬の散歩で寄る場所やランニングステーションなど、地域の人が何度も使う場にすることも大切です。拠点は集合場所にもなります。集合場所には目印が必要で、遠くから見えるものが良いです。例えば、旗があがっているとか、大きな木があるとか。それがアイコンになります。まちのシンボルになると愛着になります。旗が上がっている「あの川沿いの建物」と言われるようになるといいですね。そのうち、子どもたちが公園の名前を愛称で呼ぶようになっていくと思いますよ。

【東横堀川で地域に愛される渋谷利兵衛商店を訪問】

● 最後に、梶木先生が感じたβ本町橋の魅力や可能性について、何かあればお願いします。

（梶木）

β本町橋に来れば、誰でもご機嫌に過ごせる場所になったらいいと思います。目の前に水の揺らぎがあるのだから、それを活かしたほうがいいですね。水辺はずっと見ていても飽きないものがあります。それが最大の自然です。水は人間が最初に触れるものですし、五感を揺すぶるものがあります。それを上手く生かせる場所になって欲しいです。